

# 人生の大きさを

梵鐘を丸太でたたけ

？  
じつと考えてみよう

むかし、甚太郎（じんたろう）という十歳になる少年がいた。甚太郎は近所のお寺でよく一人で遊んだ。ある日、お寺の和尚（おしょう）さんが甚太郎を呼び、こう言った。

「本堂の裏に蔵（くら）があるじゃろ。実はあの蔵の中に代々保管されている宝物がある。その宝物がなにか、蔵に入って見てくるかい。」

甚太郎は興味津々（きょうみしんしん）で蔵に入っていった。蔵には窓が一つもなく、なかは昼間でも真っ暗でなにも見えない。しかし、目の前に「なにか」があることは気配でわかる。ただ具体的になんであるかは見当がつかない。そのとき、甚太郎の足裏に小枝のような木片が触れたので、彼はそれを拾い上げ、目の前の「なにか」をたたいてみた。

チン、チン・・・ カラン、カラン・・・

甚太郎は蔵のなかから出てきて本堂に戻り、こう告げた。

「なんだ和尚さん、あれは『鍋（なべ）』か『やかん』ですね。」

和尚さんは「そうか、鍋・やかんだったか。はっはっはっ」と空に向かって笑い声をとばし、去っていった。

—— 歲月は流れ、甚太郎はじゆうぶんな大人になっていた。生まれ故郷を離れて仕事を持ち、結婚をし、父親になっていた。が、都での仕事がつまずき、追われるように、きょうこの町にもどってきた。ここで再出発をするつもりだ。甚太郎は何十年ぶりにお寺に行ってみた。変わらぬ境内には、変わらぬ姿で和尚さんがいた。甚太郎を見つこう言った。



「蔵のなかの宝がなにか、また見てくるがいい。」

甚太郎は、蔵のなかに入ってしまった。あのときと同じように、足裏に触れた木片を拾い上げ、目の前に感じる「なにか」をたたいてみた。

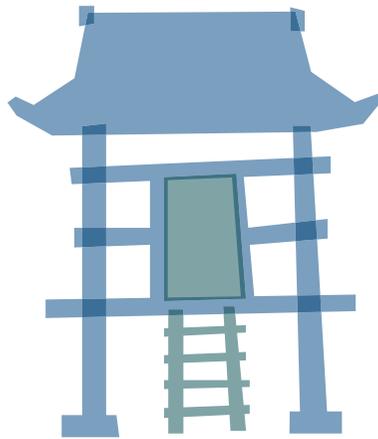
チン、チン・・・ カラン、カラン・・・

「やっぱり鍋かやかんか。でも、和尚さんが宝物というんだからなにかあるのだろう」と思いながら、甚太郎はさらにしゃがみこんで、足元のまわりを手で探ってみる。クモの巣やらほこりやらをかぶりながら、頭をどこかにぶつけながら、はいつくばって手を伸ばしていくと、重い丸太のようなものが手に触れた。その丸太を持ち上げ、甚太郎は目の前の「何か」を力いっぱいたたいてみた。

ゴォーリーン。

甚太郎は走って本堂に戻り、顔を赤らめてこう言った。

「和尚さん、あれは大きな鐘（かね）だったんですね。あんなにふかい鐘の音は聞いたことがありません」と。



生きることは、ほんとうに複雑で奥深い活動です。わたしたちは、生きているあいだに無限に成長が可能ですし、そこから無尽蔵（むじんぞう）に喜びや感動を引き出すことができます。けれどその一方で、停滞や漂流もあるし、悩みや苦しきもたくさん湧き起こってきます。

まわりの人たちをよく観察するにつけ、また、テレビなどに出てくる有名人をながめるにつけ、さらには歴史上の人物を読むののだなと気づきます。そうした千差万別の多様性こそ、人間が生きることの複雑さや奥深さを表わしているともいえます。

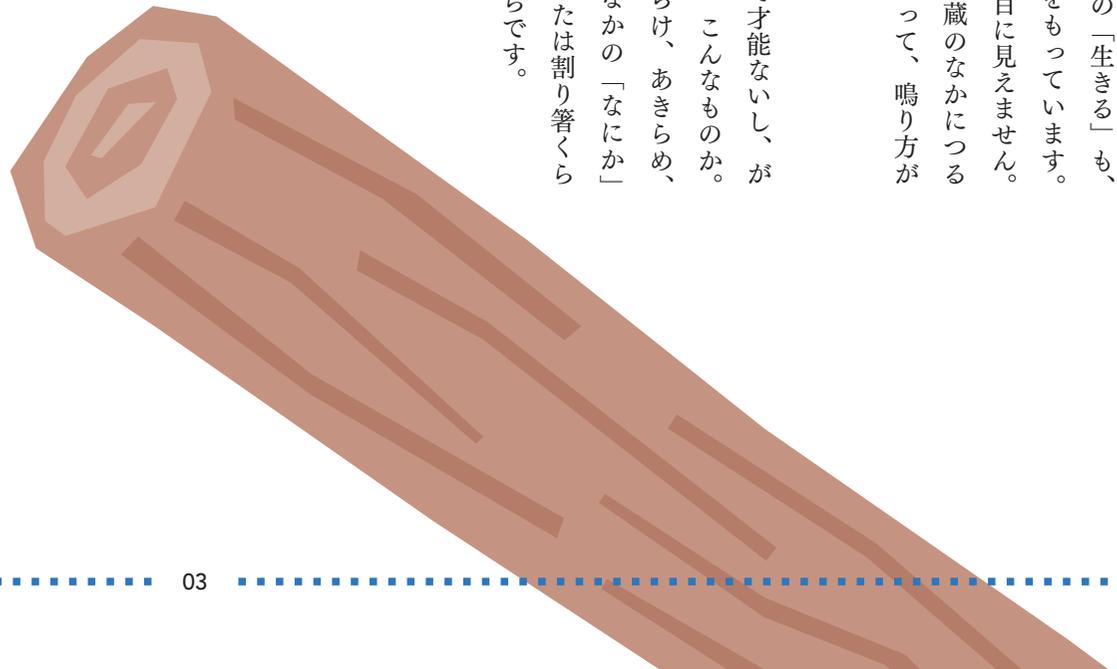
さて、問題はあなたの「生きる」です。あなたの「生きる」も、まちがいをなく、とてつもない複雑さや奥深さをもっています。ただ、それがどれほどのものかは、あらかじめ目に見えませんが、あなたの「生きる」は、現時点では、真つ暗な蔵のなかにつるされている「なにか」です。そのたたき方によって、鳴り方がちがってくるのです。

もし、あなたが生きることに対して、「自分って才能ないし、がんばっても限界あるよな」とか、「生きるって、こんなものか。楽しいこともないし」とか、そんなようなしらけ、あきらめ、割り切りの気持ちで過ごしていくなら、蔵のなかの「なにか」はちっぽけな音しか鳴らさなんでしょう。あなたは割り箸くらしいもので、いいかげんにたたいているだけだからです。

しかし、もし、あなたが大きな丸太を持ち上げて、強くどーんとたたけば、その「なにか」は必ずゴォーンと鳴るものです。その「なにか」はそもそも立派な梵鐘なのです。そして、その奥深いゴォーンという音は、打った本人のみならず、村じゅうに響いて、人びとに時を知らせたり、心を落ち着かせたりするはたらきをします。鍋・やかんが、せいぜい自分が食べるためだけの役しかはたさないことを考えると対照的です。

「丸太で強くたく」とはどういうことでしょうか。「丸太で」とは、自分自身が丸太のように太く頑丈になるということです。そのために、自分の才能をいろいろ磨いていく、自分の健康を増進していく。「強くたく」とは、強い思いを持ってものごとに当たっていくことです。「いまは自信がない。ないけれども、何度もチャレンジすることで自信はついてくるものだ」「動いた分だけなにかが見えてくる。もっと動こう。その先を見るために」「しんどいけど、そのしんどさがあるからやりがいもある」といったような気概（きがい）のことです。

どんな環境に、どんな自分で生まれようと、その生は深い音のする立派な梵鐘です。鐘をたたいてみて、小さな音しか鳴らなくても、鐘にケチをつけるのは筋違いです。それは鐘の問題ではなく、あなたのたたき方の問題なのです。



14歳から  
大人まで

生きることの根っこを考える

# ふだんの<sup>🍎</sup>哲学

Philosophy for Everyday Living

『ふだんの哲学』は、中学生から大人まで読んでいただける思索のための小話集です。

学問的な哲学ではなく、ふだんのできごとのなかからふかく考える種を見つけ、

ふだんに（不断に＝絶え間なく）心を健やかにしていく内容をめざしています。

ほかにもシリーズ記事がプロジェクトサイトにありますので、是非のぞいてみてください。

\*本記事は営利を目的としない教育用途であれば、個人や学校・各種グループにおいてご自由にお使いください。

## 「ふだんの哲学」ウェブサイト

<http://careerscape.lekumo.biz/tetsugaku/>

村山 昇 (info@careerportrait.jp)

サカイシヤスシ (info@lantadesign.com)